

# 製作意欲を高める被服教材の提案

田中 美貴・今井 裕子・村上 温子

## Proposal for Teaching Materials for Clothing to Heighten the Students' Manufacturing Desire

Miki TANAKA, Yuuko IMAI and Atsuko MURAKAMI

**Key words:** 製作意欲 Manufacturing desire, 被服教材 Teaching materials for clothing,  
被服製作授業 Dress making classes

### はじめに

生活文化学科では、平成10年7月11日(土)、本学DCL教室において高校の家庭科の先生を対象に、第3回ファッション研究会を開催した。この研究会は、「広島におけるファッション教育の革新をめざして」というスローガンのもとに、より効果的なファッション教育=造形教育の在り方を模索し、新しい家政系教育の充実に向けて、研鑽、意見交換、情報交換の場として企画したものである。

プログラムとしては、学長、学科長の開会の挨拶に続き、ファッション、インテリア両コースの研究発表を行った。ファッションコースは現代若者ファッションの動向分析から話を進め、高校生男女に好感度の高い被服教材の提案を行った。

本論では、順次発表の内容を紹介し、私ども生活文化学科ファッションコースの造形教育への取り組みを記したい。

### 1. 現代若者ファッションの動向

マーケット・インの発想からものづくりを考えるようになった80年代以降、企業は着実にマーケティング力を高め、市場をリードする商品を提供するようになった。しかし、世界のカラー情報や素材情報、コレクション情報、また企業内データから絞り込む次シーズンのトレンドは、マーケティングが緻密に行われれば行われるほど結果は似通ったものとなり、商品の同質化といった事態を招くようになった。

一方、世界的規模で市場展開する海外企業は、トレンドを牽引する企画力と、巨費を投じて構築したブランドイメージをもって日本市場へ参入してきた。

苦戦を強いられるようになった日本は構造的欠陥の是正やブランドの見直し等、成果をあげている企業もあるが、多くは量的拡大を打開策とするなど、供給過剰がもたらす消費の低迷に一層拍車をかけている。

このような状況下で唯一活況を呈しているのがヤング市場である。不況知らずといわれる団塊ジュニア世代以降の若者市場では、ファッション雑誌や口コミ情報を抛り所とした、短サイクルの消費が繰り返されている。

およそ若者がファッションの主導権を握るようになったのは60年代後半のミニスカート以降であるが、あれから30年、世界のストリートのエネルギーは、流行の表層のみならず、深い部分にも作用して、世の中を徐々に軽やかで格式ばらない方向に移行させてきた。

ファッションは「上」から「下」への構図は逆転し、「下」から「上」への構図が、伝統的なオート・クチュールの世界にさえ影響を与えるようになった。

日本においても無名の新人が地方や都市で製作活動を始める動きが96年頃から芽生え始めた。インディーズ・ブランド(独立系)と一括して呼ばれるこれらのブランドは、組織を離れたデザイナーやパタンナー、学生、ノンプロの若者達が、企画から縫製、販売までを手掛けており、凝った作りの「一点物」「手作り」感の濃厚な自由な発想の服づくりを特徴としている。

自分で納得できるものを作り、顧客がそれに共感して買う。互いに顔が見えている状態での親密な関係が、

インディーズ・ブランドのそもそもの始まりであったが、全国的な裾野の広さで展開された中には淘汰されるものも多い反面、生き残るブランドの中には、世界に向けてジャパン・オリジナルを発信できるクリエイターも育ちつつある。

## 2. 被服教材の提案

男女共修の家庭科では、男女、別教材を展開することの困難さから、男女兼用のアイテムを選択する傾向がある。ベストやパンツ、エプロン等の作業着がこれにあたるが、1. でも述べたように現代の若者たちの潜在的なクリエイションへのあこがれを前向きに受けとめて、デザインや素材の選択を任せる方法を試行した。

具体的には、本学ファッションコース1年、田中・今井両セミナーの学生に、デザインおよびパターンメイキング、縫製を担当させた。ただしこれは希望者を募ったもので、取り組みの順序をこちらが示唆はしたが、あくまでも学生たちの自発的な活動であった。

「デザイン班」のメンバーは 中池文美、福島寛子、空理佳、山本真由美、大王麻記子、東亜希子、木村明江、宇江田恭子、塚本由美の9名で、協議の結果、ストレッチ素材を使用した「ラインテープ・パンツ」ということにデザインの方向が定まった(図1、図2)。授業風景を図3に示す。

ラインテープ使いのアイテムは、若者の「スタイル」の一つとして定番化しているが、着方によってはトレンドにもなる側面を持ち合わせており、テープの位置やトップスとのコーディネートで着装効果が期待できる。デザイン班のメンバーが持ち寄ったデザイン画をもとに製作の可否を検討し、5タイプのパンツおよびトップスにデザインを絞り込んだ。

## 3. 使用素材

今回使用した素材の特徴を、表1・表2に示す。

衣服用に使用した布地は、販売時「ジャージ」と称されていた1点①と、「リリンガー」と称されていた色違いの3点②③④の2種類である。この2種はよこメリヤス二重組織である。衣服上のラインテープ用テープ⑤はたてメリヤス両面トリコットである。この5点に使用されていた糸の見かけの織度は、約160~185デニールで類似している。②③④のリリンガーは、見かけの織度・密度・平面重に僅かな差がみられるが、染色・整理加工時に生じたものと判断される。

衣服用に使用した布地、衣服上のテープとも二重組

## ラインテープ・パンツ



図1 デザイン画(岡崎真理画)

### 材料

布地 60cm  
テープ 120cm  
ゴムテープ ウエスト寸法・5cm程度  
ニット用ミシン糸  
ニット用ミシン針



## ラインテープ・パンツ

材料 布地 60cm  
テープ 120cm  
ゴムテープ 70cm  
ニット用ミシン糸 (フジックス・Festlon)  
ニット用ミシン針 (ORGAN家庭用エキストラニット針11号HA×18P)

図2 ラッピング用レタリング(宇江田恭子画)

織で形態安定性がよく、編み地特有のほつれ・ラン・耳まくれも生じにくい扱いやすい素材である。しかしながら、衣服に使用する布地と衣服につけるテープの経方向の伸び率に約2倍の差があるため、縫製時に工夫が必要である。

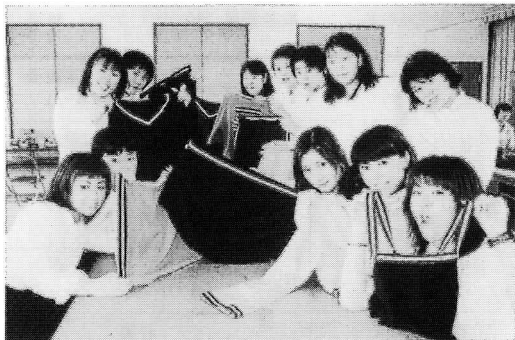


図3 授業風景

表1 使用素材の特徴 (その1)

販売時呼称	繊維鑑別 (%)	組織	見かけの織度 (D)	密度 (目/2.54 cm)		厚さ (mm)	平面重 (g/m <sup>2</sup> )
				ウエール数	コース数		
① ジャージ (白・灰空)	ポリエステル100	緯編 (二重組織) (平編・リップ)	白 165.5 灰空 184.8	32.3	48.3	0.66	281
② リリンガー (ベージュ)	ポリエステル100	緯編 (二重組織) (表3とび表・とび裏表裏とび)	165.1	63.5	40.4	0.46	222
③ リリンガー (ブラウン)	ポリエステル100	同 上	167.9	63.5	40.1	0.46	224
④ リリンガー (ブラック)	ポリエステル100	同 上	169.0	63.5	40.4	0.42	224
⑤ テープ (白・緑)	ポリエステル100	経編 (両面トリコット)	白 159.9 緑 163.9	26.5	26.4	1.04	373
⑥ ミシン糸 レジロン ニット用	ナイロン100 (ナイロン66)	上燃 Z / 下燃 S	100/2	上燃1,100回/m 下燃1,300回/m			

表2 使用素材の特徴 (その2)

測定項目		① ジャージ (グレー)	② リリンガー (ベージュ)	③ リリンガー (ブラウン)	④ リリンガー (ブラック)	⑤ テープ	⑥ ミシン糸
引っ張り強さ (kgf)	緯	84.6	104.3	103.4	99.7	経のみ 98.2	緯経 バイヤス無 1250
	経	41.4	59.4	59.7	56.1		
	右45° バイヤス	64.2	71.6	71.2	69.5		
	左45° バイヤス	63.6	81.5	77.4	75.1		
伸び率 (%)	緯	189.9	130.7	128.8	119.0	経のみ 105.2	緯経 バイヤス無 30~35
	経	243.4	203.6	212.4	189.4		
	右45° バイヤス	151.8	107.2	109.1	99.0		
	左45° バイヤス	147.7	106.2	104.5	95.2		
伸張回復率 (%)	緯	96.6	93.1	92.7	92.6	経のみ 81.1	—
	経	94.0	93.0	90.9	91.6		
	右45° バイヤス	96.2	94.6	95.4	95.1		
	左45° バイヤス	96.0	94.8	94.6	94.6		

試験方法は JIS L 1018・1030に準拠

#### 4. パターンの作成

今回使用した服の生地はよこメリヤスの二重組織、ラインテープはたてメリヤス両面トリコットだったので、織物感覚でパターンを作成した。

モデルの持っている雰囲気을大切にするため、ほとんどのパターンは着用予定のモデルが交代して対応できるように11号サイズで作成し、試着後パターン修正を行った。

トップとボトムのスカートは文化式婦人原型<sup>1)</sup>から、また、ボトムのハーフパンツは基本パンツの製図<sup>2)</sup>を

参考にパターン展開した。

#### 5. 縫製仕様の注意点

縫製に関する一連の作業は織物の場合と同様な手順で進めた。メリヤス生地使用によるライン・テープパンツの、特に織物縫製の場合と異なる箇所を注意点としてまとめた。

##### ① 印付け

生地のウエールとコースの布方向に注意をし、型紙を配置した。へらやチャコペーパーは布地が厚いため

使用できないので、生地裏に出来上がり線をチャコで直接描いた。

### ② 裁断

生地は布捲くれもせずしっかりしていたので、ほつれ止めは別にしなかった。

### ③ 仮縫い

ラインテープは付けず服地のみ印通りしつけをし、仮縫いを行い、試着時にモデルの体型に合わせた。

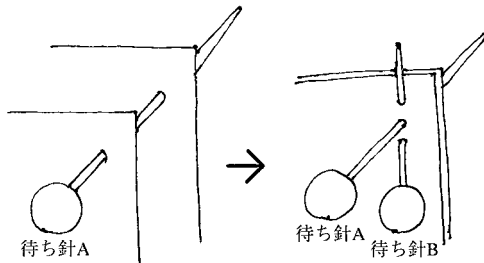
### ④ 試着・補正

この段階で一部モデルの交代が行われ、ラインテープは、モデルの体型に合わせてデザインのイメージ通りの場所を確認した。

### ⑤ 待ち針打ち

肉厚な布のため、待ち針をする際印がずれやすいので注意をし、2段階打ちをした(図4)。

直線の縫製は待ち針を2段階打ちをしたまま、少し布を緊張させてミシンをかけた。



まず印通り待ち針Aを打ち、布を貫く。  
次に待ち針Aで合わせた印近くの布を待ち針Bでくい留める。

図4 待ち針の二段階打ち

### ⑥ しつけ

カーブを縫製する場合は、縫い目がずれにくい斜めしつけを採用し、出来上がり線が斜めしつけの中央になるよう工夫した。

### ⑦ ミシン縫製

縫製にはニット用ミシン針11号、ニット用ミシン糸50番(ナイロンのフィラメント糸)、テフロン製の押え金を使用した。

送り歯による縫いずれを防ぐために、トレーシングペーパーを下に敷き布の滑りをよくした。押え圧力は弱めに調整した。

### ⑧ アイロンがけ

縫い目がすっきりと割れた状態であれば、作品の完成度がより高くなるが、縫い目に「きせ」がかかって

いるようだと、もたついた、下手な縫製であるような感じを与えてしまうので、縫い代を割る時やミシン縫いをした後は必ず湿らせたスレキの当て布を使用し、裏からアイロンを当てた。

当て布については、「ウールなどにアイロンをかけるときに、生地を傷めぬよう生地の上に置く布のことを当て布といい、その上からアイロンをかける。」<sup>3)</sup>とあるが、今回使用した生地はポリエステルである。蒸気アイロンは高温でなければ蒸気を発生しないため、アイロン底の熱によりポリエステルが溶融する恐れがあった。そこで、当て布に霧を吹いて(湿らせたスレキ)使用した。

裾などの折り返りは、服をボディに着せ仕上げ時にアイロンを当てた。

### ⑨ 裾上げ

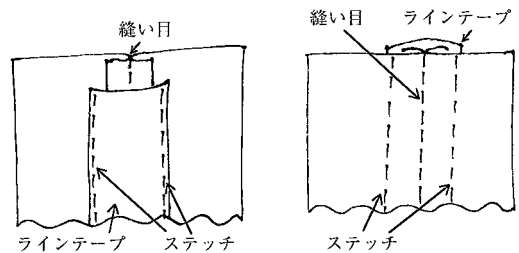
製作時間短縮のため市販の裾上げテープや裾上げ用の接着剤を試してみたが、素材の凹凸のため、裾上げには不適當だったので、裾にロックミシンをかけ、幅2.5cmのステッチとした。

### ⑩ ラインテープの縫い付け

ラインテープは、土台の生地との伸び率の違いから、縫い付けが問題となった。また、待ち針で止めただけでの縫製は縫いずれをおこすので、丁寧なしつけが重要な鍵となった。

特に脇などの縫い目上にテープをつける場合は、脇は中表ではなく外表で印通り縫製をした後、縫い代を1cmに裁ち落として割り、その上にテープを被せるようにした(図5)。

テープの張り付けに工夫したことにより、脇の縫い代が身体に当たることがなくなり着用者にやさしい仕上がりとなった。



(表)

(裏)

図5 ラインテープの縫い付け

パターンメイキングは、黒田詠子、岩重真紀子が担当し、「縫製班」としては熊澤幸子、重政綾子、川岡桂

子, 塚本由美, 榎木志保, 大川貴美恵, 糸崎順子の7名が健闘した。

#### 6. ファッション教育研究会における提案

ファッションショーでモデルをつとめたのは, 山岡智子, 山岡亜由美, 西本真子, 永田綾乃, 奥田薫の5名で, そのヘア&メイクは, 丸山美樹, 谷川亜希, 中野江里, 竹添菜美, 空 理佳の5名が担当した。

ファッションショーを終えてモデルを前に, デザイン解説を田中が, パターン・縫製仕様解説を今井が行った。モデルが退場した後, 素材について村上が実際のサンプルを配布して解説を行った。また, 当日研究会に参加された先生方には, 基本となるラインテープパンツ着分を, 縫製にふさわしいミシン針, 糸, ラインテープ, ゴムテープと共に贈呈した。製図に添えたデザイン画を担当したのは岡崎真理, ラッピングのレタリングは宇江田恭子が担当した。

おわりに

学生達の若い感性や自主性を基に, 素材の選択からデザイン・縫製, 作品発表までの展開を試みた。デザインを決定する課程で着装効果を考えるというのは多分にファッションショーを意識したもので, このイベントへの期待感が今回大きな原動力となった。「発表の場」を設けることで製作意欲が高まり, 被服製作が通常の実習よりはるかに楽しい作業として, 理解力も高まり充実したものになるとしたら, 一考に値するといえよう。

#### 参考文献

- 1) 文化服装学院編「文化ファッション講座 婦人服1」文化出版局
- 2) 「日本ヴォーグ社のソーイングシリーズ7 クライ・ムキ パターンブック パンツ」日本ヴォーグ社
- 3) 田中千代「新 田中千代服飾事典」同文書院

#### Summary

The Department of Living Culturology held the Third Fashion Educational Symposium for high school teachers of homemaking courses on July 11 (Sat.), 1998.

Concerning the fashion section, analyzing contemporary young people's fashion trends started the Symposium. Then a proposal for the most popular teaching materials for high school students' clothing classes was provided by using a mini-fashion show style.

A description of our approach is as follows:

1. In the Japanese fashion business world, a review of brands and structural defects has been going on recently, and yet overproduction causes continuous sluggishness of consumption. But in spite of such serious circumstances, the young people's market is the only active area in fashion sales. Thanks to fashion magazines and word of mouth, a short cycle of continuous consumption is seen among the young.
2. After the mini-skirt trend in late 1985, the young have taken a leadership role in fashion, they have gradually led society to the light and casual trend.
3. After 1996, obscure new designers were appearing in central or regional cities and they created the movement of making clothes from a freer conception. This movement is called 'Indies Brand-independent groups' and they do everything by themselves from planning and manufacturing to selling.
4. Accepting the contemporary young people's subconscious longing for creation mentioned above, we tried to find a method of making them choose designing and materials by themselves. As a consequence of these investigations, we found that using stretch materials was adopted for designing of 'line tape pants' considering the visual effect when they wear these clothes.
5. Preparing a stage for students gives them creative zest and understanding; and as the result of this, dress making classes became much happier than ordinary classes.